

本書について

本書は「全ての診療科で役立つ皮膚診療のコツ これだけは知っておきたい症例60」の姉妹篇として企画されました。評判のよい姉の姿を横目で見て所作を真似ながら、ちよっぴり自分なりの振る舞いをしたくなった妹の「個性」とは、以下のようなものです。

- ① 姉は1症例左右見開き2ページという端正な構成ですが、本書（妹）は右に問題、ページをめくって左に解答、というやんちゃな作りです。
- ② 姉はオーソドックスに丁寧に解説してくれていますが、本書は右ページのクイズで始めます。めくると左ページが解説ですが、解答も構成も文章も型があるようではありません。よく言えば、妹は自由奔放です（悪く言えば、ちよつとだらしがいい？）。
- ③ 多くの類書と違って、著者独りで書き上げました。本書の構成が標準から外れて見るとすればそのせいです。ただし、芯（内容）は至極まっとう（標準的）ですので、ご安心ください。
- ④ 読者として主に想定しているのは、プライマリケアの第一線で活躍されている一般医（非皮膚科専門医）の先生方です。一般医が皮膚疾患を診ようとする動機はさまざまあると存じますが、その時点ですでに専門外というリスク領域に足を踏み入れていることに鑑み、本書の波長は少々リスク管理側にチューニングしてあります。一般医は、皮膚疾患を扱う際あまり規格に外れないようにする方がいいと思いますので、ガイドラインと添付文書を入念に引照しています。その上で、姉と違って悪戯な妹は、幾つもの「落とし穴」を用意しました。
- ⑤ 読者の便宜（実用性と読み易さ）を重視し、薬剤名は主な商品名（概ね先発品）で記載してあります。個人的な利害関係を背景に特定の製品を称揚している訳ではなく、開示すべき利益相反はありません。

- ⑥ 本書の目的は皮膚科の「治療」の解説ですが、正しい「診断」が先行しないと、正しい「治療」はあり得ませんので、診断についても、幾つかパターンを示しました。この際、所見の組み合わせから想起されるのは診断「仮説」であり、その「仮説」下の演繹で所見が再評価され、「仮説」と「所見」の往還で診断が収斂して行く、という仮説演繹法のあり方を、両矢印 (⇔) で暗示しています。
- ⑦ クイズが物足りない皮膚科専門医のために、1 ページで書き切れなかった内容を、巻末の「註記・文献」で補足しました。ここでは更に奔放に書いていますので、筆が滑って転んでいるところなど楽しめるかも知れません。
- ⑧ 本書は主に一般医向けですが、医学生が読んでも研修医が読んでも専門医が読んでも、それぞれのレベルで何かしら得るところがあるよう、わかりやすい一方で深みのある記述と構成を心がけました。

本書により、読者の皮膚科診療の理解が深まり、それが巡って患者さんの利益に逢着することを、「姉」と同様、祈ってやみません。

最後に、「妹」の我儘に辛抱強くお付き合いいただいた羊土社編集部 秋本佳子さんに深謝致します。

2013年9月

梅林芳弘